この人は日本紀をこそ読みたるべけれ

秋山　虔

「紫式部日記」には、「源氏物語」あるいは「源氏物語」とおぼしい物語について触れている若干の記事があって、「源氏物語」の作者紫式部、あるいは紫式部によって書かれた「源氏物語」についていろいろと考えさせる材料を提供しておりますが、そのなかにこんな文章があります。

左衛門内侍といふ人はべり、あやしうすずろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ心うきしりうごとの、おほう聞こえはべりし。うちの上の、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」とのたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がる」と殿上人などにいひ散らして、「日本紀の御局」とぞつけたりける。いとをかしくぞはべる。このふるさとの女の前にてだにつつみはべるものを、さる所にて才さかし出ではべらむよ。

口訳しておきましょう。左衛門内侍という女房がおりまして、この人が私（紫式部）に対してどういうわけか変に悪意を抱いていて、私には身におぼえのない、いやな陰口がずいぶん耳に入ってきました。帝（一条天皇）が「源氏物語」を女房にお読ませになってはお聞きあそばしたとか、そのときに「この人（紫式部）は日本紀を読んでいるに違いない。たいそうな学者のようだ」と仰せられたとのことだが、それをこの内侍がすかさず悪推量して、私がひどく学問を鼻にかけている、と殿上人などに言い触らして、「日本紀の御局」というあだ名を付けたのだそうな。まったくもって笑止の沙汰というものです。私は実家の召使の前でさえ遠慮して漢籍を披くなど憚っておりますのに、宮中でなぞ学問をひけらかしたりするものですか。

紫式部日記の、このあとのところは誰方もご存じの、式部の少女時代のエピソードです。漢籍の勉強をする弟の惟規が、読みお

ぼえるのに手間どったり、忘れたりするところを、式部は不思議なほど呑み込みが早かったので、父親の為時が、この娘がどうして男子でなかったのか残念でならない、と常に嘆いていたという話であるとか、男でさえ学問をひけらかす者はうだつのあがらないのが常であるということを聞かされてからというもの、自分は漢籍などとは無縁の人間になりきってしまっていたのだったが、一昨年の夏ころから中宮（彰子）の御前で「白氏文集」の巻三・四の新楽府をこっそりと進講申しあげている、そのことをあの口さがない左衛門内侍が聞きつけたら、どんなに悪口を言い触らすことになるだろうか、まったく世間の口はうるさいものである……、といったようなことが書きつづられております。

紫式部日記のこのような記事は、私たちに多くのことを想像させます。紫式部という人がどんなに漢籍に通暁していたか、またそうした学才を人前で隠蔽することに汲々としていたか、もっとも、そういったことをこうして書き記しているのですから、考えようによっては必ずしも自分の学識を誇示していないとはいえないのでしょうが、そうしたことには深入りせず、さきほどの「この人は日本紀をこそ……」という一条天皇の言葉に固執して少しばかり考え進めてみたいと思います。いったい天皇はなぜこのような感想を洩らされたのでしょうか。

『紫式部日記全注釈』の著者、萩谷朴氏は、「日本紀」を「日本書紀」に限らず国史一般をさすと見る藤井高尚「日本紀御局考」の説を支持し、「つまり、『源氏物語』の構想は、国史に通暁したものにしてはじめてよくなし得るものであるという、一条天皇の批評眼である」と説いておられます。そして、さらに「『源氏物語』螢に、「神代より世にあることを記しおきけるなり。日本紀などはただ片そばぞかし。これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ」とあることから、一条天皇が、紫式部は『日本書紀』を読んでいたのだと判断されたのであろうとする見解も生じ得るわけであるが、しかし、螢の巻を含む『源氏物語』第一部後半が、はたして、この一条天皇の評言以前に成立していたか否かを明らかにするすべもない。「日本紀などはただ片そばぞかし」という提言は、むしろ左衛門内侍の陰口に対する反駁であるかとさえ考えられるからである」と述べておられるのですが、この件については後ほどまた触れることにしまして、ここでまず検討しておきたいのは、萩谷氏のいわれる「源氏物語」の「構想」なるもの、また一条天皇の「批評眼」なるものを、どう考えたらよいのかということであります。萩谷氏はこの「構想」なり「批評眼」なりについては立ち入って考察しておられませんので、私なりに考えてみたい。

私は、古来、「源氏物語」の研究史のうえでたいへん重んじられた準拠研究によって指示された諸事実を思いあわせて、一条天皇の批評をまず合点するのであります。いったい準拠とは何か。この準拠についてのまとまった研究として清水好子氏の『源氏物語論』（塙書房　昭41）という著書がありますが、清水氏は「物語の人物や事件を史上実際のそれにあてはめて考えうる場合、古注は史実のそれらを準拠と呼んだ」と説明しておられます。従って、準拠とは、研究者や読者の側の読み方に属するといえましょうが、しかしながら準拠研究なるものが、もっぱら「源氏物語」においてのみ論議されてきたということは、「源氏物語」の世界そのものが、そこに語られる内容を歴史的事実に符合させたり、またそれを連想させたりすることによって、読者にその実在性を信じこませるという方法によって書かれているからであったといえましょう。清水氏はこうも述べておられます。「源氏物語の写実性といわれるもののなかには、こういう要素も大きな比重を占めているといわねばならない。それは現代の我々が理解している写実性とはかなり異質なものであることはいうまでもない。人間の真実というものが時代によって異なった考え方をされる限り当然である」と。

ところで、この準拠というのは、いわゆる私たちの観念しているモデルというものとはいささか違うということに、この際注意しておかなければならない。どう違うのか、具体的に少しばかり説明しておきましょう。桐壺の巻に「その頃、高麗人の参れるなかに、かしこき相人ありけると聞こしめして、宮の内に召さむことは宇多の帝の御戒めあれば、いみじう忍びて、この皇子（光源氏）を鴻臚館に遣はしたり」という文章がある。この「宇多の帝の御戒め」というのは、いわゆる「寛平御遺戒」、これは宇多天皇が若年の醍醐天皇に帝位を譲られるに際して、心得とすべきことを書き遺したもので、この「寛平御遺戒」には「外蕃の人、必ず召すべき者は、簾中に在って見る。直対すべからず」というような条文があります。つまり、「桐壺」巻の文章では、この御遺戒を拠りどころとして、どうしても外国人を召さねばならぬという公の用件ではなかったので、光源氏――その頃はまだ源氏の姓を賜わっていない皇子ですが――を鴻臚館に差し向けたということになりますが、それはそれとして、ここに「宇多の帝の…」とわざわざいかめしくことわられていることによって、読者は物語の世界の時代を、醍醐天皇の時代と重ね合わせて受け取らされることになります。顧みれば、桐壺の巻の冒頭の「いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひけるなかに…」とあった後宮の状況も、単に漠然と過去の架空の帝の時代のことではなく、醍醐天

皇のそれであるに違いない。してみれば、主人公光源氏も醍醐の皇子ということになりますが、そうなるとおのずからそれが誰かを特定することができるようであります。角田文衛氏の御著書の『日本の後宮』(学燈社　昭48)という本にたいへん便利な付録がついていて重宝させていただいておりますが、そのなかの「歴代皇妃表」というのを見ますと、どの天皇にどれだけ皇妃がおられて、どの人がどれだけ皇子皇女を生んでいるかが一覧できます。これによりますと醍醐天皇には藤原基経の娘の中宮穏子ほか十五人の夫人がいた。そして皇子皇女三十四人の名があげられていますが、皇子で臣籍に下った人は三人しかいない。そのなかで源高明という人の経歴・事跡が光源氏のそれとかなり共通するところがあります。本学の卒業生の小山敦子さんの『源氏物語の研究』(武蔵野書院　昭50)という御著書には、光源氏の原型は源高明であり、光源氏は源高明説話にもとづいて書かれたものである、ということを立証しようとするたいへん詳細な研究がなされておりますので参照されるとよいと思いますが、いかにも、源高明の素姓・経歴等を見ていくと、光源氏との類似性を否定することができません。高明は右大弁源唱という人の娘で醍醐天皇の更衣――近江更衣と呼ばれた人ですが――の周子を母とする人で延喜二十年(九二〇)に七歳で臣籍に下った。参議・大蔵卿・大納言・右大臣を歴任して左大臣となりましたが、安和二年(九六九)に謀反の罪によって太宰員外帥に左遷されました。二年後に召還の宣旨が下って、翌年帰京し、のちに葛野の別荘に隠棲して天元五年(九八二)六十九歳で世を去りました。この高明という人の経歴を見ていきますと、光源氏のそれと共通するところがある。なかんずく名実ともに実力者であった一世源氏が政界を逐われて流謫の運命を経験するという悲劇は前後に類例がない、それだけに須磨・明石に謫居する光源氏に高明の面影が宿っていると見ることができます。しかも高明は九条家の師輔の婿であったために九条家と対立する小野宮実頼や小一条師尹らによって陥入れられたのですが、そうした経緯と光源氏が左大臣家の婿であったがゆえに弘徽殿女御やその父右大臣一派の画策によって放逐された経緯とは、いかにも対応しているといえましょう。古来多くの注釈書が光源氏の事跡の準拠として高明のそれを指定してきたゆえんですが、しかしながらそのことは高明が光源氏のモデルであったということではありません。いま高明と光源氏のそれぞれの素姓や経歴の似寄っている点を申したのですが、しかし両者の違いはその類似性をはるかに上まわっているといえましょう。

いったい、光源氏の父桐壺帝にしても、醍醐天皇の面影がそこに見られるとしても、醍醐にはさきに申したように基経の娘、穏

子が中宮となっておりまして、朱雀・村上の両天皇の母となっております。桐壺帝が先帝の内親王の藤壺を中宮としたのとは大違いであります。それはそれとして、源高明の場合にしても、その母の近江更衣の父源唱の極官は右大弁で、光源氏の母の桐壺更衣の父の大納言とは違います。またこの更衣は高明のほかに時明親王・盛明親王という二人の皇子を生んでおりますし、さらに四人の皇女の母でもありました。そのなかの二人は九条師輔の妻となり、妹宮（雅子内親王）はのちに太政大臣となる為光を生んでいるのですから、そんなわけで近江更衣という人は光源氏を生んだ桐壺更衣――ご承知のように「源氏物語」の発端の悲劇のヒロインであり、光源氏の人生を強く規定した桐壺更衣とはたいそう違っております。こんなふうに細部を洗い立てていったらきりがないのですが、光源氏その人にしても、その人生の出発の原点と申してよい藤壺とのかかわりという、このもっとも大事な問題は、源高明の事跡のなかにこれを探索することは無理な話であります。その他、光源氏と源高明とは一々指摘するのも愚かしいくらいに、その経歴・事跡を異にしておるのであります。

さて、じつは光源氏の経歴・事跡には、単に高明のそれだけが指摘されてきたのではありません。古注釈以来現在まで、多くの人々の事跡が、光源氏の人生の途上における種々の経験に関して引合いに出されております。ここで一々具体的に説明することは省略させていただきますが、古い順にあげてみますと、聖徳太子・大津皇子・桓武天皇・嵯峨天皇・光孝天皇・源融・在原行平・同業平・菅原道真・藤原伊周・同道長等々、こういった人たちの面影があれこれの場面に濃く、淡く、あるときは複数で重なりあいながら光源氏に投影している。これらの人たちは紫式部の生きた藤原時代の最盛期に至るまでの日本史のなかで、およそさまざまの形で顕著な事跡を残した人々ですが、それらのイメージを重層させながら光源氏の栄光と悲惨の運命が「源氏物語」には語り尽くされているといえましょう。

その光源氏の人生がどういうものであったかについては、事新しく本日は申し述べませんが、その全体像は、さきに申した高明にしてもそうですが、ここに列挙した多くの人物たちの面影をちらつかせながらも、それらとはまるで異質に、それ自体として比類ない独自のものであります。ここにあらためて準拠ということの意味がはっきりしてくるでしょう。物語のなかの人物の行為なり事件なりの実在感が、史実との符合あるいは史実への連想によって保証されるということは、しかしながら物語世界が史実によりすがっているということではありません。逆に、物語世界に史実を組み入れながら、そのことによって史実を引き離し、かえっ

て物語世界の独自性を際立てようとする。いわば史実とは別個の、史実とは絶縁した虚構の現実がそこに組みあげられているといえましょう。

「紫式部日記」の寛弘五年十月一日条には、敦成親王（のちの後一条天皇）の誕生五十日の祝宴に、紫式部がいささか酔いのまわった藤原公任から「あなかしこ、このわたりにわか紫やさぶらふ」と問いかけられて、「源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上（紫の上）はまいていかでものしたまはむ」と、心のうちに思いながら聞き過ごしていたという記事があります。この記事がそのときの事実をありのままを伝えているのかどうかは別として、この日記に自分の心中をこのように記している点に私は注意したいのです。「源氏に似るべき人も見えたまはぬ」ということは光源氏という主人公にいわゆるモデルはありえないとする式部の認識でありましょう。式部の思いは、「源氏物語」の主人公はこの世にそのような人物などありうべくもない、自分の魂の奥処から紡き出された想像裡の理想像であって、現実の誰彼にたとえられるようなものではない、というものでありましょう。そのことはこの主人公の人生を語るのに、多くの史実を織りこめたことはまったく別問題であります。そのような主人公ですから、この光源氏のもっとも大切な妻である紫の上だって、いはしないのだ、と心に思っている。口に出して公任に答うるのではなく、公任の問いかけを黙殺しながら、ひとり心中に思いをひそめているというしだいでした。

たいそうまわり道をいたしましたが、一条天皇が「源氏物語」の作者紫式部について「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」とおっしゃったということに立ち戻ることにしますが、天皇は「源氏物語」を女房に読ませて耳でお聞きになったというのですから、いうまでもなくその全体的世界はもちろん、あるまとまった巻々の全体的印象にもとづいてこのような評言を発せられたのだとは考えがたいように思われます。やはり物語世界の随処に史実が繰りこまれている点、あるいは物語世界から史実が連想される点から、作者紫式部の史実についての博識に感心されたのだと考えるのが一応妥当の線であるといえましょうが、しかしながら紫式部はそのような一条天皇の批評に何を感じたのでしょうか。自分の学識を天皇から評価されたことで面目を施したことへの満足がなかったはずはないのですが、同時に「源氏物語」の世界、光源氏の人生についての理解の不足を思わずにはいられなかったのではなかろうか。物語の世界に繰りこまれた史実へのみ目を向けられたのでは「源氏物語」の本随からはずれることになる、という認識が紫式部にはある。私はさきほ

ど「螢」巻の物語論において「神代より世にあることを記しおきけるなり。日本紀などはただ片そばぞかし。これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ」という光源氏の発言について萩谷氏が左衛門督の陰口に対する式部の反駁であるかとさえ考えられるというご意見を紹介しておきましたが、むしろ私は一条天皇の「この人は日本紀をこそ…」とおっしゃった、そのことに対するさりげない形での反論、異議申し立てではなかったろうか、とも考えております。もっとも、この「螢」巻の成立時期と一条天皇の発言の時期との前後関係は明らかにしがたいわけですから――「紫式部日記」の終りのほうに一条天皇のこの発言のことが書かれているのですが、書かれた時期とそのことがあった時期とは一緒ではないわけです――、何とも判定はしかねるのですけれども、私はそんなふうに想像しております。

それはそれとして、ここで注意しておきたいのは、一条天皇が「この人は日本紀をこそ…」といわれたのは、自分で「源氏物語」の本を直かに繙き、読み進めたうえで、そうした感想を述べられたのではないということであります。「うちの上の、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに」とあるのですから、天皇は女房によって音読された「源氏物語」を耳で聞かれたのである。これは注意すべきことではないでしょうか。いったい、当時の物語は、私たちが小説を黙読するようにして享受されたものではなかったということ、テキストの読み手によって音読され、聴き手によって耳で聞かれることによって享受されるものであったということが玉上琢弥氏の一連の御論、また『源氏物語評釈』（角川書店　昭39～44）における具体的な文章解析によって強調されております。たしかに「源氏物語」自体のなかにも、あちこちに物語は読んで聞かせるもの、読みあげられたのを聞くものであるとする記事が散見されますし、例の「枕草子」「にくきもの」の段にも「物語するに、さし出でして、われ一人さいまくるもの」とか、これは「枕草子」でも能因本のほうですが、「物語もせよ、昔物語もせよ、さかしらにいらへうちして、こと人と物いひまぎらはす人、いとにくし」という記述があります。また、物語は絵を見ながら、詞を聞くという形で享受されたらしいことが、これまた数々の資料によって知られます。いちばん顕著な例として誰方もがよく引かれるのは、「源氏物語」「東屋」巻で、匂宮の妻となっている中の君が浮舟を招いて「絵なぞ取り出でさせて、右近に詞読ませて、見たまふ」というところであります。「東屋」巻のこの場面は「源氏物語絵巻」にも絵に描かれているので、私どもにはなじみの深いものですが、しかしこのような場合は特例だったのだろうとする見解があります。「更級日記」の作者のよ

うな、密室にひとり閉じこもって物語の世界に同化し、物語の世界と現実とのけじめもつかぬような、その世界へのかかわりかたをする、それがむしろ物語享受の本流なのであって、むしろその孝標女のごとき中流の女性の積極的能動的な享受行為こそ第一義的なものと考えるべきであるとする見解であります。この点は今井源衛氏の「享受の問題」(『解釈と鑑賞』昭42・1)という論文で、いろいろの方の論文が紹介されるとともに、多くの資料を駆使して論じ尽くされておりますので参照されるとよいでしょう。この今井論文に引用されている中野幸一氏の「古代物語の読者の問題――物語音読論批判――」(『早稲田大学教育学部学術研究』第十二号　昭38・12)によれば、絵を見ながら姫君が物語を享受するという形は、ダイジェスト版による第二次的な享受法であり、それは終始まったく受動的なものであって、主体的な享受ではありえないのだ、ということになります。物語文学を担うのは中流女性であり、物語は彼女らを対象として書かれたのだと中野氏は説いておられます。いま私は音読か黙読かの論議をむし返すつもりはありません。一条天皇が紫式部について「この人は日本紀をこそ…」とおっしゃった、その「源氏物語」享受が、音読される本文を耳で聞いたうえでのことだったということに注意しておきたい、と申したことから、いささか回り道をしたのですが、その回り道をした理由はお分かりかと思います。つまり一条天皇は、まともに能動的に「源氏物語」の世界に立ち向っていったのではない、ということであります。

そもそも物語なるもの、今日では数々の作品が古典として重んじられてはいるものの、当時としては童幼婦女子の玩びものであった。モノガタリという語は物語作品を指すとは限りませんで、社交的なとりとめない雑談、四方山話だとか、親しい仲間うちの歓談だとか、夫婦の閨の睦言だとか、赤ん坊のまだ言葉にもならない発声などさえもモノガタリといったように、それは表向きの有用な言語ではなかったのであります。作品としての物語だって、漢詩文や和歌など第一義的な文学と肩を並べられるようなものとしての観念は無かったのです。従って、いやしくも帝といった尊い公人である一条天皇が表立って物語を披見するなどおよそありえなかったでありましょう。「源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしける」というのは、中宮彰子に向って女房の読んでさしあげるのを、たまたま傍聴することになったというほどのことではなかろうか、と思われるのです。

その点、これはずいぶん昔の本ですが関根正直著『紫式部日記精解』(明治書院　大正13)に「…此の日記の文を見れば、女房達に源氏読ませて、帝の聞こしめされつつ、ふと評じ給ひし御言

の葉にて、固より一部に渉りて国史に校査しての仰せごとにもあらず、謂はゆる研究の結果、発し給ひし御評にもあらぬを…」と述べ、なお「然はあれど、史上の人物事跡に、たま〳〵源語中のことの似かよひたるもなきにあらねば、唯大やうに、国史に通じたる所より、かゝる世情を写し、人事の変遷をも書きつらむ。学才ある人ならでは、と概評し給ひしに止まるべし」と述べているのは、およそ適評であるといえましょう。関根氏のお考えでは、一条天皇はまともに「源氏物語」の全体を読んだのではなく、ふと感じた印象批評なのだ、とおっしゃっているわけで、それはそうに違いないのでありましょうが、私はなお、天皇が「日本紀をこそ…」といわれたということに固執したいのです。いったい「日本紀」とは何か。藤井高尚の『日本紀御局考』に説かれているように「日本書紀」と限定すべきでなく、漢文で書かれた官撰国史の総称と見ればよいのでしょうが、ということは、それを私たちが今日観念する国史＝日本歴史として一般化してはならないことになります。漢文の正史に紫式部は通暁している。だから「才（漢字の知識・漢詩文の才能）あるべし」と、そのあとに続けられたのであります。関根氏が、「国史に通じたる所より、かゝる世情を写し、人事の変遷をも書きつらむ」と述べられたのは、いささか焦点をぼかしたことにならないでしょうか。

私は、音読された「源氏物語」が耳で聞かれたのだということ、それはけっして能動的積極的な享受行為ではない、だからその批評は思いつき的な印象批評であると関根氏が説かれるのには共感するのですが、すぐにその物語内容がどうこうと考える前に、その耳で聞かれたことばそのものから天皇は「日本紀」を連想されたということがなかっただろうかと想像したりもするのであります。これは十五年前に発表されたものですが、大野晋氏の「古言雑考」（『学習院大学文学部年報』16　昭44）というご論があります。その第二節「源氏物語の文章について」という報告をあらためて思い起こすのです。「源氏物語」には一万二千の語彙が用いられ、「枕草子」には五千三百の語彙が用いられているとのことですが、「枕草子」にありながら「源氏物語」にはまったく用いられていない語は名詞で六四語、動詞で三〇語（複合語も加えて）だそうでございます。一方、「源氏」では十回以上用いられながら「枕」にはまったく用いられていない語の形容詞・形容詞語幹だけを大野氏は列挙しておられるのですが、それが八四語。ここでいま詳しくは申しませんけれども、それらの語をにらんでみると、「源氏物語」と「枕草子」とがどんなに感受性・感覚を異にしているかが実感されることになります。「源氏」は、むしろ純粋に作者やその読者の趣味や好みの色彩をもって貫かれた、

いわば偏った作品であり、宮廷の生活のなかから作者のイメージによって事柄とことばとが選びぬかれ、それによって作品全体が構築された、はなはだ特殊な偏奇的な言語表現なのである、というのが大野氏の結論でありますが、なお私は、これとは別に『講座日本語の語彙』の第二巻（明治書院　昭57・1）におさめられた竹内美智子氏執筆の「和語の性格と特色」という論文を印象深く拝見しました。この論文ではまず和語の特色を漢語と比較して説明されておりますが、さしあたって私が興味をもったのは、漢語が原則として一音一概念であり、一音節語が基礎的な語形であるが、私たちは漢語といえば二つの概念の複合した二字漢語を思い浮かべるのが普通である、事ほど左様に漢語は複合力が強いのに対して、和語のほうは漢語に比して複合力がはなはだ劣弱である、ということであります。ところで、和語のもっとも熟成したのは平安中期、すなわち女流文学の最盛期とされておりますが、なかんずく漢語漢文とのかかわりがもっとも稀薄で、量的にも最大の「源氏物語」において複合語が異常に多いという事実にぶつかる、というのであります。動詞と動詞とが複合した複合動詞は、「接頭辞的動詞＋実質動詞」あるいは「実質動詞＋補助動詞」という形式をとるのが普通ですが、たとえば「あがめかしづく」「あだえかくす」「あつかひおこなふ」「あはせいとなむ」「あらがひかくす」「あらためかはる」などといった「源氏物語」特有の複合語にいまさらながら驚かされるわけですが、動詞と動詞とを連ねた場合、単に二語が連なっていると解したほうがよい場合も当然ありますが、複合化してたいそうパンチのきいた印象深い語が新しくできあがる場合が多いでしょう。いったい和語動詞は漢語と比べて日常語として用いられることが多いでしょうが、それが複合動詞となるとき、一種ひきしまった非日常的なことばになるのではないでしょうか。『源氏物語大成』（中央公論社　昭28～31）の自立語索引や北山谿太氏の『源氏物語辞典』（東京堂　昭35）を見ていきますと、ことに北山辞典のほうはその語の用いられる文節も示しているので便利でもありますが、他の作品ではあまり目馴れない複合動詞がたいそう多い。ここに紫式部の独特の造語能力を実感することができるのですが、じつはそうした性質の複合動詞は、『時代別国語大辞典　上代編』を見ていくと、ほとんどが「日本書紀」を出典としている、というのが竹内氏のご指摘であります。つまり平安時代に訓まれた「日本書紀」の複合漢語の和訓ということになりましょうか。紫式部は「日本書紀」をはじめとして、漢文で書かれた国史や漢籍に骨の髄までなじむことによって、独自の造語能力を培い、異例の複合動詞をどんどん新造し、一種独特の文章をつづっていったとおぼしいのであります。

一条天皇は「源氏物語」が音読されるのを耳に聞いたとき、日常語としては用いられることの稀れな、異様なことばづかいに関心を抱かれたということはなかったか。耳に聞くことばは、その意味よりも、聞こえてくる一語一語が音の連なりとしてまず訴えてくるであろう。その音によってイメージを脳裡に結びつつも、それは次のことばによって斥けられながら、物語の文脈を受容することになりましょうが、しかし重い異様なことばは残響となって心に刻印されていくでしょう。一条天皇は、たいへんな学問好きのお方でありまして、醍醐・村上の両天皇に比すべき聖帝とされております。その詩文を集めた御集は今伝わっていないのは残念ですが、「本朝麗藻」というこの時代の詩人たちの作品を集めた漢詩集のなかにその御製を残している。時代の文運を盛んならしめた指導者であられたのですが、その天皇が、音読される「源氏物語」のしたたかなことばの響きに触れて、その世界への関心を惹起され、「この人は日本紀をこそ…、まことに才あるべし」という感想を洩らされた、と考えることがあるいは可能なのではないでしょうか。もっとも、「源氏物語」などと違って、男性的な語法や漢文訓読語の多い、男性知識人作と考えられている「うつほ物語」のごときが、よりいっそう漢語・漢文に距離は近いのですが、問題は、漢語・漢文ともっともかかわりが薄い、玉上琢弥氏のおっしゃりかたによれば、「女のための女が書いた女の物語」の典型といいうるような「源氏物語」であるということを前提として、以上のようなことを申してきたしだいです。

いったい人間が物事について考え、書き表すことばは、その人の知識の広狭、深浅といったレベルよりも、いっそう深いレベルに根ざす、いわば生理ともいうべきものではなかろうか。紫式部の学問教養がどのように培われたのかはあれこれ想像に委ねるほかないのでして、「源氏物語」の世界そのものによって彼女のはかり知れない学識・才能・創造力をおしはかるほかないが、その世界を紡ぎ出すために、先例のない造語能力を発揮したということは、漢籍や漢文からは遠ざけられていたのが一般であった女性であるにかかわらず、というよりは女性であるがゆえに、時代を抜きんでた学問の深さを証すものであったといえましょう。

一条天皇の発言をめぐって、とりたてて結論というべきものもない、とりとめのないお話をいたしました。

（本学教授）

付記：この論文は昭和五十九年五月十六日、東京女子大学日本文学研究会主催で行われた講演をもとに加筆されたものです。なお、『学士会会報』七六四号所載の同題の小文は、この講演の要約であることをおことわりしておきます。